

新音
少女



新普令少



閣星龍



昭和二十九年三月二十五日 印刷
昭和二十九年三月三十日 発行

定価四百五十円

著 者 川 上 澄 生

刊 行 者 澤 田 伊 四 郎

熱海市水口區牡丹臺

オフセット
印刷所

錦明印刷株式会社
東京都千代田區神田區丁王

発行所 龍 星 閣

熱海市水口區牡丹臺

目次

一 まゝ子	一
二 小鶴をばさん	二
三 輪まはし	三
四 俵屋さん	五
五 鐵道馬車と、がた馬車	七
六 雀さし	八
七 へつつい直し	八
八 でいでい屋	十
九 桶屋	十
十 人さらひ	十一
十一 岡蒸汽の唄	十三
十二 汽車の車室	十四
十三 縁日	十五
十四 お灸	十六
十五 もちの木坂	十七

十六 屋形船	十七
十七 勤工場	十七
十八 錦輝館	十八
十九 米屋ののれん	十九
二十 ばれん	二十
二十一 車の後押し	二十一
二十二 辨當箱	二十二
二十三 床屋	二十三
二十四 露西亞更紗その他	二十四
二十五 おしるこや十二月	二十五
二十六 お碗帽子	二十六
二十七 水晶と硝子	二十七
二十八 狐	二十八
二十九 電車	二十九
三十 日比谷公園	三十

三十一	大橋圖書館	三五
三十二	繪	三五
三十三	話	三五
三十四	郵便屋	三五
三十五	警視廳	三五
三十六	青山	三五
三十七	鐵砲山	三五
三十八	支那留學生の學校	三五
三十九	はきもの	三五
四十	羽織の紐その他	三六
四十一	ねつき	三六
四十二	めんこ	三六
四十三	繪本	三七
四十四	唱歌など	三七
四十五	回向院大角力	三七
四十六	鎌倉	三七
四十七	人形芝居	三七

四十八	糸綿店その他	三八
四十九	かんかちだんご	三八
五十	尋常二年	三八
五十一	百花園その他	三八
五十二	時計	三八
五十三	洋燈	三八
五十四	手風琴	三八
五十五	東洋武俠團	三八
五十六	岩本の勝ちやん	三八
五十七	汽車の汽笛・喇叭の音	三八
五十八	兵隊ごっこ	三八
五十九	牛乳屋	三八
六十	積み木	三八
六十一	記念繪葉書その他	三八
六十二	珍世界その他	三八
六十三	靖國神社のお祭り	三八

第一 まま子



「あの子どもこの子提燈屋のままつ子、上つて遊そべ、茶碗のかけて、頭こつきりことはつてやれ僕は斯ふいふ唄みたいなのを覚えて居る。備

母は今の僕より若くて死んだ。

中の産である母親は何のつもりで斯んな唄を口にしたのか解らないが恐らく少女時代の追憶からかもしれない。それが度々であつたのだらうか、僕の記憶するところとなつて居るのは。その僕は今はままつ子となつた。そして僕には二度目の母親が出来た。

母の名は小繁と云つた。然しそんな名ははやらないと見えて父は「しげ」と呼んだ。今はもうお婆さんになつた母の姉の小鶴は僕に「しげさんはお嫁に行く前に何が食べたいときいたら、かんかちだんてが食べたいと云つたよ」と云つた。

第二 小鶴をばさん

小鶴をばさんは母の姉である。もういゝお婆さんになつてしまつて僕はびつくりしたのであつた。實は長い間無沙汰をして居て十五六年振りで逢つた時におばあさんにそっくりだなと思つ



た。おばあさんといふのは母の母のことである。いつまでたつても
關西辯の拔けないをばさんである。これは神戸に長いこと住んで居
たせいかもしれない。

もうお婆さんになつたをばさんであるが僕の腦裡にあるをばさん
の顔は度々逢つて居た二十年前の顔である。

第三 輪まはし

「今日は輪をまはして遊びました」と僕は日記帖に書いて本橋先生に
上げた。尋常二年の時のことである。僕は麹町の富士見小學校で一
年やつて二年からづつと青山師範の附屬小學校に居た。附屬小學校
では日曜日の日記を書かせて先生に出させるのであつた。

半紙を半分に切つてそれを二つ折りにして横長に綴ぢた日記帖で筆で書いたものだつた。僕は轉校したてでよくわからず一番始めの日記には前述のやうな一行の文章しか書かなかつた。

僕は往來や庭をよく鐵の輪を廻はして走り廻つたものだつた。輪は金物屋で賣つて居た。輪とそれを押して廻はらせる鐵の棒と別々に離れて居る方が古い形式で鐵の棒の先を小さな輪で廻す方の大きな輪につないであるのが新式であつた。僕は兩方とも持つて居た。

輪と棒と離れて居る方が難かしかつた。輪を強く押してやると輪は先の方へ一人て廻つて行く。それを後から追ひついて棒の先の曲げてあるところを輪にあてる。するとしやりし



やりしやりと音を立てるのであつた。時には固い往來の上で輪ははづむのであつた。

第四 俤屋さん

相乗りと稱する二人乗りの巾廣の俤があつた。僕は祖母と並んで腰をかけると俤屋さんは僕達の腰の邊から毛布で足の先まで包んでくれる。これは人を動かないやうにするのかもしれない。その毛布にもいろいろ感じの好いのや悪いのがあつた。

俤には雨の降る日は母衣をかけた。背後から頭の上の方へ母衣がかぶさり一枚の防水布が顔の前を通つて足元の蹴込みの端に張り渡された。顔の前には四角な窓がついて居た。昔はその窓には何が張

りつけてあつたのかしら。とにかくその窓を通して白い雨足に煙る街景が見えた。

俤の背には定紋が金で蒔繪してあつた。その紋の邊に一本の横木がとりつけられて居て後押しの俤屋さんは片手でその横木を握つて押して走つた。又俤の前に肩から綱をかけてその綱を俤へとりつけて梶棒の先に駆けて行く俤屋さんのあるのは二人引きであつた。

俤は黒く光つて居た。俤の背後へ立つと自分の形が平べつたくなつて寫つた。走つて居る俤の背後に追ひつくと平べつたい自分が平べつたい足をふらふら走らせて居る姿が寫つた。



第五 鐵道馬車とがた馬車



品川、銀座、日本橋、上野、浅草雷門、鐵道馬車が走つて居た。僕等は鐵道馬車の切符切りの眞似をして遊んだ。鐵道馬車は軌道を走るのであつたが無軌道を走るがた馬車があつた。九段坂の下に板橋通ひのがた馬車があつてそれに乗ると直に氣もちが悪くなつた。僕達はがた馬車の眞似はしなかつた。

青山の通にはかなりおそくまで澁谷通ひのがた馬車が残つて居た。

第六 雀さし

青山の長者丸の横丁で雀さしの爺さんを見た。
少し腰の屈みかけた爺さんは菅笠をかぶり手甲
をはめ腰に網をさげ竿を手に持つて居た。矢部
さんの竹垣の中から追ひかぶさるやうに茂つて
居る竹の茂みに爺さんのつなぎ竿はするすると
延びて行つて雀の羽根をさした。

第七 へつつい直し





「へっつい直し」の呼び聲を僕は今でも
眞似ることが出来る。「へっ!」と切つて、
聲をはり上げて「つい——」と段々下げて
来て、口早やに「直し」と同じ音階で結ぶの
である。僕の家の臺所にもへっついが
二つ並らんで居た。作りつけのへっつ
いてあつた。「へっつい直し」は天びんを
かついて「もっこ」の中へな土を入れて
歩いて居た。夕方の坂の上で人の形は
逆光の裡に黒々として居た。

第八 ていてい屋

「てーい、てーい」とていてい屋は低い音階でうなるやうに呼んで行つた。頭に手拭をかぶつて尻はしよりをして股引をはいて居た。小さな包を肩から斜に背負つて居た。どうもその「ていてい屋さん」は細つそりとした老人で白足袋に草履をはいて居たやうな氣がするのである。



第九 桶屋

桶屋は割つた青竹を輪にして肩にかけて居た。そして手桶や小桶



にたがをはめるとなると、往來の端に腰を下ろして仕事を始める。かつて來た青竹の輪から一本抜いてそれを細く割るのであつた。割り竹の端を持つて彼は地面の上をしなはせながら又細く割つて行くのであつた。僕は桶屋や下駄の齒入れ屋やいかけ屋や研ぎ屋の路傍の移動工場て仕事の終るまで熱心に見物したものであつた。

第十人さらひ

「蛙が鳴くから歸へろ」あばよ芝よ」とか何とか友達同志は別れぎわに云ふのであつた。往來に日の光がなくなり横丁の奥の方がうす暗くなり屋根の上に又軒ひさしの邊りに蒼白い炊煙が棚引く頃、人さらひがやつて来るやうな氣持ちがして僕はうちに歸へるのであつた。人さらひは大きな袋を背負つて居てその中に子供を入れて遠い所へ連れて行つてしまふのだから恐ろしい。「此の間ね、人さらひが居たよ。」といふやうな話が子供仲間て出ることがあつた。「僕も見えたよ。」といふ人もあつた。僕は僕も見えたやうな氣もするし又見ないやうな氣もするのであつた。

